

2016 年台風 10 号 久慈川水害 現地調査報告

2016 年 11 月 18 日

京都大学防災研究所 水資源環境研究センター

野原 大督

発達した台風 10 号の接近・上陸に伴い、東北地方太平洋側から北海道にかけての北日本では、8 月 29 日から 8 月 31 日にかけて大雨となり、各地で水害が発生しました。筆者は、このうち岩手県久慈市内を流れる久慈川流域における水害の現地調査を 9 月 9 日に実施しました。久慈川流域では、台風 10 号の接近・上陸に伴い、8 月 29 日から 8 月 30 日にかけて大雨となりました。気象庁アメダスによる観測で、久慈地点で 30 日 19 時 50 分頃までの 1 時間雨量が 58 mm（同地点観測史上最高）となったほか、30 日 19 時までの 24 時間雨量が、久慈川本川上流の山形地点で 162mm、支川の長内川上流の下戸鎖地点で 230.5mm（最大 1 時間雨量 80 mm、同地点観測史上最高）となるなど、記録的な大雨となり、それに伴い沿川で氾濫が生じました。

このうち、久慈川と長内川の合流部の上流側に広がる久慈市の市街地中心部では浸水被害が大きく、特に JR 八戸線よりも上流側では、浸水痕跡の現地調査から、1.5~2m の浸水があったとみられる地区もありました（写真 1）。また、久慈川にかかる JR 八戸線の橋梁には、大量の流木が捕捉されており（写真 2）、付近の堤防上の流木の散乱状況などからも、当該橋梁における流木の捕捉によって川が塞がれ、すぐ上流の久慈川の水位が上昇・越流し、市街地の浸水に寄与した可能性が確認されました。また、支川の長内川では、上流に設置された岩手県滝ダムの洪水調節操作や水防団による水防活動により、下流域における大規模な越流は防がれましたが、滝ダムの上流側の地点では、久慈川での事例と同様に、橋梁に捕捉された流木によって、川の水がせき上げられ、氾濫したとの住民の方の証言があり、実際にそのような痕跡が確認されました（写真 3, 4）。

今回の水害の現地調査では、浸水に流木が寄与した事例が複数確認され、水害時における流木の動態の解明や、流木の供給源となる上流の山林の適切な管理方法の確立などの重要性が改めて浮き彫りになりました。今後、こうした方面での研究の更なる発展が期待されます。最後になりましたが、今回の水害で被災された皆様に対し心からお見舞い申し上げますとともに、調査にご協力下さった皆様に対し深く御礼申し上げます。

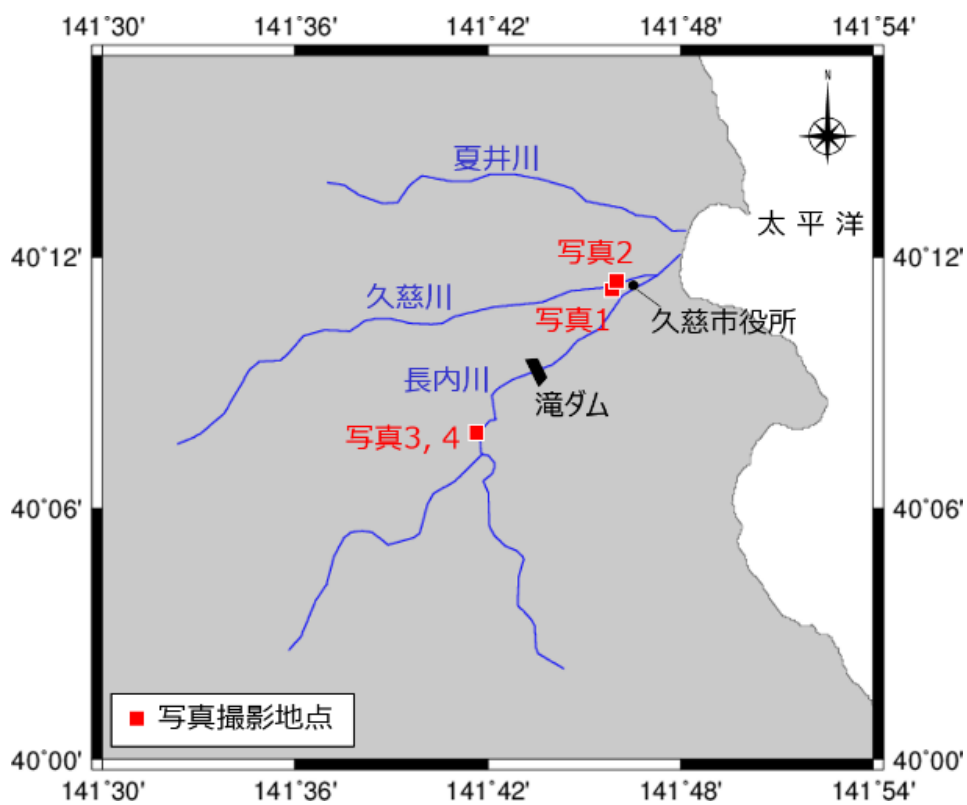


図1 久慈川流域および写真撮影地点



写真1 久慈市中心部における浸水痕跡の状況（久慈川右岸）。
氾濫水によって流された草がフェンスに付着している。



写真2 久慈川の JR 八戸線橋梁に捕捉された流木。



写真3 長内川の滝橋地点における流木捕捉の痕跡と氾濫被害の状況。橋の欄干が破損し、共架されている上水道管路の破損により断水も生じたとのこと。



写真4 長内川の滝橋周辺における氾濫痕跡。